

南ア共和国訪問記

アパルトヘイト解消は重い課題

—民主主義の制度と教育内容を—

1991年8月21日～30日

イギリス風都市ヨハネスバーク

五月の中央委員会から帰りの新幹線で、今回の南アフリカ共和国訪問団に岡山県連から出すのは時期的にみて無理だろうと話し合っていた私が、県連の代表で「またもや海外へ」ということになろうとは……。

今回の南ア訪問団は日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会（日本AALA連帯委員会）が企画したもので、総勢四四名の構成でアフリカ民族会議（ANC）を訪問するのは、各国でも例を見ない規模であるという（アメリカの二〇数名の弁士団が今までの最大数のこと）。出発までに、日本AALA連帯委員会の「指定文獻」数冊のうちの南ア・アパルトヘイト共和国（吉田ルイ子著）とアパルトヘイト南アフリカの現実（日本AALA連帯委員会編）を通読し、七月初旬に開かれたANC大会の様相を報じる各種の新聞・機関紙を拾い読みして、いくばくかの予備知識を頭にいれる準備をした。

八月二日の夜に上野での交流会、二二日の午前中に学習会と結団式という日本での最後の行事を終え、いよいよ成田から出発という運びになった。夕方六時のキャセイ航空で飛び立ち途中香港で一時間余りの時間待ちを経て、南アフリカのヨハネスバーク、ヤン・スマッツ空港に現地時間朝の六時に到着。時差が日本とは七時間だから、つごう一九時

間をかけての南ア到着だった。ヤン・スマッツ空港は国際空港というにはイメージにほど遠く日本のローカル空港並の建物で、早朝ということもあってか人もまばらであの成田の混雑とは大きな違いである。

空港からヨハネスバーク市街地までは二四Km、バスで約四〇分程度。まず行き交う車に日本車はと氣になってみているとだいたい三台に一台の割合で走っている。ついでに、車のごとで話題になったのは車体の前後に「コブ」のようなものをつけているのが何のためだろうかということであったが、別の日に道路に駐車しようとしている車がバックして後ろの車にその「コブ」で当てて、車間を取っているのを見て「正体」見たリということであった。道路はアメリカ、カナダについて整備されているというところで、市街地までの道路は六車線や七車線で走れる。高速道路も料金とはならない。日本と同じ右ハンドルで左側通行、イギリス支配の歴史の影響だろうか。

ヨハネスバークの気候は、南半球の八月は冬の終わりに当たるとは緯度が二六度で、標高一八〇〇mというわりに半袖で気持ち良い。空は抜けるように青く、空気がリッチクリームがあったほうがいいといわれるほど乾燥している。九月から春になり観光シーズンを迎えるという。バスのなから眺めるヨハネスバークまで

の風景でまず目に入ったのは、赤っぽく広々とした平地に奇麗に区画されて建てられている白人居住の住宅。だいたい百坪程の土地に平屋で庭があり表に駐車場を取ってある。朝早くということもあってか、道路を歩く人、バスストップで待つ人のほとんどは黒人だ。南アフリカの人口約二九三〇万人のうち七三%の二二四〇万人が黒人ということからすれば（白人四五〇万人、カラード二五〇万人）、当然黒人を多く見掛けるというのが自然だ

が、アパルトヘイト（人種隔離政策）による居住地の分離がいまなお影響があるなかで、白人居住地で行き交う人々がほとんど黒人というのは、白人の家庭でメイドとして働く、あるいは付近で仕事をもっていると理解をし

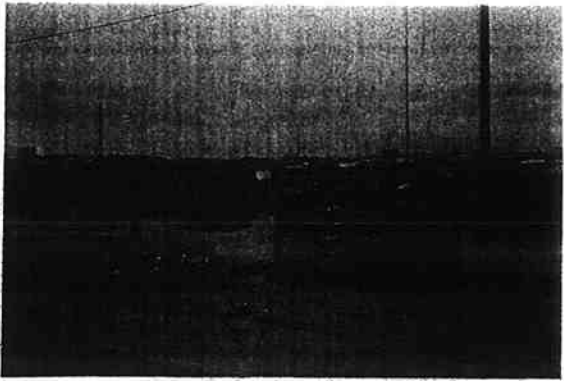
た。

安い物価、日本人も進出

ヨハネスバークの中心部に近づくにつれ高層ビルが目についてくる。人口は約二〇〇万人、南アの経済、世界の金の中心地。一目目の宿泊はその中心地から少し離れた三つ星のホリデイインホテルで、まずは荷物を運び込む。午前七時三〇分ごろなので宿泊客が食事を取っている時間帯。フロント係を除いて働く人はすべて黒人といった感じ。打ち合わせを済ませ、近所の銀行でドルを現地通貨のランド（R）に交換にいったが、申し込み記入表の担当は白人の女性で三〇〇ドルを渡した私に八五〇ランドをくれたのは大きな黒人の婦人だった。さっそくホテルに帰り、喫茶室をかねたようなフロントでコーヒーを注文してランドを使ってみたが、一杯が二ランド二六セント（一Rは約五〇円）だった。部屋から日本に電話を掛けたら二分足らずで三〇ランド、一五〇円程度で済んだ。昼食をとるため二日から宿泊する予定の街の中心地にあるデボイシャーホテルに向かったが、そのときまわりに梅と桜の木がありどちらの花をつ

けていた。デボイシャーホテルでの昼食メニューはスパゲッティ、ツナサラダ、炒めたご飯に牛肉を添えたものなどがあつたが、どれも七〜八ランドで食べられた。しかし、肉はどれもかたかったようだ。ちなみに、小瓶なみのビールは二ランドあまりで味はまずまずだと評価をされていた。このホテルはオーナーがインド人だということだが顔はみせず、おかみさんに当たる体格の良い白人女性が愛想良く話し掛けてくれる。しかし、彼女がそばを通り過ぎたあとの「きつーい」香水の匂いには辟易するほどだった。働いているのはやはり黒人がほとんどで、フロント係も白人と一緒にいるのは交互に配置されていた。ホテルでみるテレビは英語とアフリカーンス（オランダ語を中心にした独自の官語）とで放送されていて、部屋においてある説明書も建物にある広告も両方で書かれている。

ヨハネスバークには日本料理店が二軒、たまたま両店に行く機会があつた。ひとつは五つ星のホテル（ヨハネスバーク・サン）のなかにあり、鉄板でステーキを焼くのをメインにしているお店でコックさんが日本人、「なかいさん」が着物姿に大きな指輪をした白人の女性、お客には黒人女性もいてなかなか賑わっていた。現地の肉で漬けて柔らかくしたという約二〇%のヒレステーキが三〇ランド程度で食べられた。もうひとつは郊外の高級住宅地にあつて、ざるそばが一八ランド、



ラーメンは一六ランドでその他にうな重、お鮎などがメニューにあり、マスターは日本人、オーダーをとりにくるのは黒人青年という店だ。二〇才代のマスターに話を聞くと、現地の黒人はお客としては来たことがない、一時は一ランドが三〇〇円程度の時もあったが円が強くなって今は五〇円、だから独自の彼は適当にゴルフをしたりして一カ月三万円ですごせる。給料は日本からもらうので貯金が月々二〇万円以上できる。日本企業が儲けられる国として狙って最近「西武」がホテル建設で視察にきていた、などなど。私達にとっては、日本で食べる程度の値段だが、日本で学習した時の南アの黒人鉱山労働者の給料が月に約三万円（白人の鉱山労働者は約一五万円）というのを思い出せば、現地の黒人がお金の面からもなかなかいけないのもうなすけるし、日本人が白人高級住宅街で商売がうまくいき、適当にゴルフもできるのも名譽白人ゆえと考えればいいのだからかと、味噌ラーメンといなりずしを食べながら、アフリカにきているんだと改めてかみしめた。

ANCのたたかいは続く

二二日、二三日の両日はANC本部や南ア民主教員組合を訪問して、懇談を重ねてきた。ANC本部はホテルのあるところから比べれば下町と言う雰囲気があるところの二二階建てのビルにある。このビルは石油で名を



ANCはいわゆる五役と五〇人の全国執行委員を選出している。今回の大会で新設された全国執行委員長のオリバー・タンボ氏とも面談でき、四四人の訪問団一人ひとりが握手と短い会話を交わす事ができた。

日本に似た教職員組合政策

南ア民主教員組合(SADTU)やANC教育局の幹部と話し合うなかで、アバルトヘイトの弊害が端的に現れている黒人の教育問

聞クシユルがもつていたので約五億円ほどでANCが買い取ったという。内に入るのに、空港と同じようなチェックを受ける。この付近の交差点の角には必ず、新聞、タバコ、雑貨、フルーツなどを黒人の青年やおばさんが露店で売っている。新聞は二ランド余り、ANCの動きなどを多く掲載しているネーション(日曜版)が一ランド足らずという値段。タバコを買ったとき「いくら」と聞いた私に黒人の青年が二ランドと答えた声にも表情にも「張り」がなかったのが気になった。

ANC本部での懇談では、七月の大会で新しく選出されたシリル・ラマホサ書記長も全国執行委員会の会議の合間をぬって出席した。鉱山労働者出身といわれるラマホサ氏は、歓迎の意を表すとともに、ANCの合法化を勝ち取り、施設分離法、土地法、集団地域法、人口登録法を廃止させてきたのは南ア国内の人民のたたかいと結び付いた国外の長期間にわたる支援活動の成果と述べ、今後の支援・協力を要請した。また、アバルトヘイト主要法律が廃止されたとはいえず、全政治囚の釈放、政治亡命者の帰国の保障、弾圧法の廃止などが解決されず、白人支配が引き続き維持されている現実を紹介しながら、白人も黒人も平等、一人一票制を基本にした新憲法制定へ向けて今が南アの将来を決定する岐路にあることを強調。南ア政府と

題は深刻だと強く感じた。白人には黒人の五倍にあたる教育費が費やされているが、黒人学校には理科の実験器具もない。黒人学校は満員で、教員が足りない、その教員も質が悪い。なぜそういう状態がうまれたかの話し合いでは、アバルトヘイトのもとでアフリカーナ(主にオランダ系)政府がキリスト教国家主義にもとづく、現実を見ない教育を押し進めてきたこと、白人選民思想のもとでの教育をうけたものがいま教員になっている、一九七六年のアフリカーンス語での教育の義務化に端を発したソウエトの蜂起以来、教育を受ける機会をなくした、ということなどが出された。SADTUは非人種差別に基づく約四万人の教員組合で、女性が半数、白人も少数だが加盟している。だが、政府は組合として認知しないばかりか教育改革にたちあがる教員を解雇するなどの迫害を加え、アバルトヘイトを維持することをねらう別の組合を後押ししているという。新採用教員を一年間は試用期間としていると聞いて、思わず日本とよく似ていると参加者一同が感じたものである。黒人の初等・中等学校は約九千校あるらしいが、不就学の子どもたちがたくさんいる様子が話のなかでうかがえた。

二四日はANCが解同を本体とする反差別国連運動(IMADOR)に加盟している問題で、村崎勝利全解連副委員長(訪問団副団

の交渉を妨害している問題が黒人間の暴力問題を例にあげ、デクラーク政権とインカタ自由党(スール族を基盤とした保守派黒人政党内)との憲法から起こる暴力事件や「治安維持部隊」が引き起こす弾圧事件で何千人もの黒人が殺されたという。また書記長は、南ア政府が白人政権運命を図るため、近年民族解放運動で独立を勝ち取ったモザンビーク、アンゴラ、ジンバブエ、レソト各国の反政府活動に援助をしていること、ナミビア(一九九〇年三月にアフリカ大陸最後の独立を果たした国)独立を妨害する勢力に一億ランド以上も拠出していたことが判明したこと、そして現在の南ア政権の大きな狙いは、ANCが選挙で勝てなくすること、将来にわたって政権に参加出来なくすることだと分析していると述べた。

しかし、またラマホサ書記長は、ANCは平和的手段で今の状況を変えていくため、他の解放運動組織も含めた愛国戦線会議で「和平会議」を数週間内に行い、デクラーク陣営をも含めた暫定政府を樹立させる、新憲法への策定手続きを開始させることを当面の目標において、「全政党政会」を呼び掛けるなどの努力をしているとも述べていた。実際、二四日付の新聞でもANCからムベキ国際局長が出席して、インカタ、デクラーク政権の代表と和平会議が二三日に行われた旨が報道されていた。

長)、山中一美中執、馬原鉄男立命館大学教授、そして私の四人がANCのターボ・ムベキ国際局長とユフス・サルジョ国際局長とユフス・サルジョ国際局長との会談を行い、「ANCはIMADORとは関係がない、個人的に副理事長になってしまっている者に脱退するよう要請する」という結論を引き出すことができた。たった四〇分ほどの会談だったが、通訳の平野一成氏(ANC東京事務所員)が朝から駆け巡つてのやつとの思いで実現した日程で、そのうえ約束の時間から胃を痛くするほど待たされたうえでの会談成立だけに、ほっとした気持ちが正直なところだった。その後ムベキ局長が来日し、情勢に変化があったようだが、会談の結果は評価されるべきものと今も思っている。

悲惨な黒人居住区(ソウエト)

二五日はソウエトへの視察と住民との交流だ。ソウエトは南西の街(SOUTH WEST TOWN)の略称で人口は二五〇万人とも四〇〇万人とも言われている。ヨハネスバークからバスで向かう。途中、金を探掘したあとポタ山が続いていたが、ヨハネスバークには全部で六つの探掘会社と二七五カ所のポタ山があると現地ガイドの若子・ギブソンさんが説明してくれる。車窓から見た風景では、子どもたちがサッカーに興じていた以外はあまり見えないが、一帯に目の前に

現れて来るのが赤茶色の荒涼とした広大な見渡す限りの土地に、トタンでつくった小屋という感じの家々である。ビニール袋を張り付けたりした横幅六m、縦に四mほどの大きさで、台風でもくればいつべんに飛んでしまいうような小屋が密集して立ち並びどこまでも続く。周りはゴミだらけ、水道も電気もないというところで道路際にあつた水汲み場には白いバケツをもつた婦人がずらりと並んでいた。私たちのバスを見つけた子どもたちが、元氣よく駆け寄ってくる。途中、道路に沿った所に木造の小さな診療所があつたが、いわゆる折騰師的な診察をしているとのことだ。トタン小屋より少しましな、丸っぽい屋根の三軒長屋住宅（エレファントハウスと呼ばれている）が立ち並んでいるモフォロサウス地区でバスを降り、住民と交流。なかへ入らせてもらったが、キッチンともう一部屋があるだけで九人が生活している。ベッドの下もキッチンも使って寝ているという。家賃は月に三〇ランド。表では、羊の足を網で焼いていたので少し食べてみたが、皮だけで堅くて苦かった。歓迎の意をこめて大柄な婦人達が歓声をあげて踊りだす。その後にも段々と近付いてくるという感じ。婦人と子どもはどこでも明るく陽気だ。

七六年のソウエトの蜂起で亡くなった高校生たちへの慰霊の意味も込めて、七二人の婦人が力をあわせローソクづくりから仕事を始めたという。

観光地ケーブも民族闘争の渦中に
二六日の夕方に喜望峰で有名なケーブタウンに到着。その日は空港からホテルまでの道程だけだが、テーブル・マウンテンがはっきり見えた。全貌が見えるのはめずらしいらしく、その山が見えなくなるころにケーブタウンの市街地に入った。第一印象で建物はヨハネスバークより重層な趣があつてきれいな街だと感じたが、夜は歩いては出ないよう注意される。ピストル強盗などニューヨークより犯罪率は高いという。

翌日はケーブタウン港の見学からはじまったが、長袖のカッターにカーデガンでも肌寒いくらい。港は観光用に「改装中」で黒人労働者が気軽にあいさつをしてくれる。港には日本のマグロ漁船数隻が停泊していた。その後、ANC西ケーブ支部の事務所を訪問して懇談し、「黒人無断居住地」を視察する。ソウエトとおなじく悲惨な生活の実態を目の前にしてきたが、治安部隊として軍隊がテントを張って居住しているのが特に目をひいた。私たちが行ったついで一週間程前に、その居住地（クロスロード地区）のANC支部長の家に爆弾が投げ込まれ、家の外へ出ようとした

子どもも含めて四人が殺されたという。たまたま留守で難を逃れた支部長と、目の前で家族が殺されるのを見てきた八才ぐらいの女の子に会えることができた。その家は半分焼き落ちていたが、屋根にはANCの旗がはたみいでいた。支部長のチヨクさんは「治安部隊が家族を殺した。しかし私はANCとともに解放運動をすすめていく」と落ち着いた氣迫のある声で訴えていたのが心に響きました。

四四名の老若男女が初めての国でもに一日間行動するという、大変な事をやり遂げられたのは、AAA理事務局の皆さんの奮闘と参加者の「アバルト・ヘイトの実態をこの目でとらえよう、そして日本の労働者、国民の闘いを南アの人民に知らせよう」という意識があつたからだと思う。ソウエトと西ケーブで、アバルト・ヘイトのために「無断居住地」を余儀なくされた何百万人もの黒人が住んでいる実態を垣間見て来たが、想像をこえる厳しいものだった。相当大きなスケールでの政治、経済の改革と着実な民主主義の発展を基礎にした教育と人間性を高める人民の闘いをうまくかみ合わせていく事が必要ではないかと痛感した。（一九九一年九月一七日）